横浜医学，65，495-502（2014）

原著

横浜市における小児科医の熱性けいれんに関する調査

本井宏尚[1)]，藤原　祐[1)]，渡辺好宏[1)]，
武下草生子[1)]，森　雅亮[1)]，宇南山貴男[2)]

[1)] 横浜市立大学附属市民総合医療センター 小児総合医療センター，
[2)] 宇南山小児科医院

要　旨：【緒言】熱性けいれんは小児科医が日常的に診療する救急疾患である．熱性けいれん（Febrile Seizures: FS）は概ね良好の経過をたどるが，細菌性髄膜炎，急性脳炎・脳症，代謝性疾患，てんかんなどとの鑑別を要するため，慎重な対応が必要である．本邦では1996年に福山らにより「熱性けいれん指導ガイドライン」が作成されており，多くの小児科医が本ガイドラインに準じて診療にあたっていると思われる．しかし，実際の診療では問診，保護者への説明内容，ジアゼパム坐薬の予防投与の適応，治療内容は様々である．【目的】ガイドラインの遵守状況を把握し，勤務形態や医師経験年数によるFSに対する考え方・診療方法の違いなどを明らかにする．また，ガイドラインに記載のないけいれんを誘発する可能性のある薬剤の使用方法，画像検査の適応について臨床医の考え方を調査する．【対象・方法】2013年８月から９月の期間に横浜市立大学小児科同窓（同門）会員にファックスでアンケート調査用紙を配布・回収した．【結果】調査依頼総数は219名，回収総数は59名であり回収率は27％であった．多くの小児科医はガイドラインに準じて診療しているが，細部では医師毎に対応が異なることが分かった．【結論】横浜市で勤務している多くの小児科医はガイドラインに準じて診療している．FSは外来で遭遇する機会の多い予後良好疾患であるが，FSの中に重症疾患が隠れていることを常に念頭に置き，ガイドラインに基づいた一貫性のある的確な検査・治療がなされることが重要だと考えられる．

Key words:　熱性けいれん（Febrile seizures），
熱性けいれん指導ガイドライン（Febrile seizures instruction guidelines），
ジアゼパム（Diazepam），抗アレルギー薬（Antiallergic drug），
抗てんかん薬（Antiepileptic drug）